

---

# 三十路男の日々徒然

須和光輝

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

三十路男の日々徒然

### 【Nコード】

N2263S

### 【作者名】

須和光輝

### 【あらすじ】

先日めでたくも三十路になった俺。特技は家事。そんな俺が妹に強制……ゲフン、頼まれたバレンタインデーのお菓子を作っていた時。俺は自分の世界に突然別れを告げる事になる。

人を勝手に拉致っという帰せないとか、魔法使えとか、ある種個性的な周囲の人間に囲まれ、受け入れがたい現実に打ちのめされるも大人の諦めの良さで異世界での日々を送る俺の物語。

「R15」と「残酷な描写あり」は念のためです。

一話目は以前『Arcadia』様のテスト版に投稿したものの改訂版です。

## 今から魔のつく偉人業

先日、俺は三十歳になった。皮肉った比喻だと巷で言うところの『魔法使い』というやつである。早い話がこの歳になるまで不純異性交遊もましてや同性交遊もしなかったという事なのだが。

自分でも不思議に思うほど俺の中の性欲は低い。淡泊というにも程がある。一応誤解のないよう言っておくが、ナニが立たないというわけではない。

このご時世、金さえ出せば異性だろうと同性だろうと肉体関係なんて容易く結べるものだがそうはしなかった。多少潔癖症の気があるのか、他人とそういう事をするのに何となく気が進まなかったのだ。(だからと言って身内がいいというわけではない。)

基本的に俺が他人に関心を示さないという部分が影響しているのかもしれないが、誕生日を幾分か過ぎた今現在も童貞街道まっしぐらである。

そんな俺ではあるが、外見は極めて不細工：ではなく普通だ。日本人らしい彫りの浅い顔立ちに平均身長より多少高めだが細身の体軀。髪を染めていた時期もあったが根元が黒くなる度に染め直すのが面倒になって今は地毛の黒い髪。少々乱視が入ってる為仕事中は眼鏡着用。どこにでもいるような平凡顔。

容姿的には本当に清く正しい一般人である。強いて特徴を上げるとするならば、料理や掃除など家事が得意と言える程度には出来るくらいか。しかしまあ今は珍しくもないだろ？

家族構成は母・俺・妹二人の四大家族。しかし俺と妹達は半分しか血が繋がっていない。

俺自身の父親は俺が物心つく頃にはいなかった。母曰く、五つ歳上だった幼馴染みである俺の父と母の高校卒業後に式を挙げる予定

だったらしい。が、父は母の卒業式が間近に控えた時期に仕事帰りに単車事故で呆気なく他界。その知らせを受けて倒れた母が病院で検査したら腹の中に俺がいたのがわかった、という話。

その後高校を腹ボテで卒業し、数年は実家で俺の祖父母と一緒に俺を育ててくれた母はそんな経緯もあってか家族がバイクに乗ることをひどく嫌う。その為、俺もバイクの免許は持っていない。

俺が小学六年の時に妹達の実父となる男性と再婚したが、その義父も下の妹が中学に上がる前に病気で亡くなった。その時期はまあ妹達も思春期で色々あったんだが省略。そんなわけで家には男は俺だけだ。女ばかり三人もいる環境で男の俺の肩身の狭さは推して知るべし。

父親という存在がいない中、頑張って働いて家族を支えた母には素直に感謝もするし、尊敬もしている。だからこそ家事が得意になるくらい手伝いもしたし、妹達の面倒も見た。歳の離れた妹達は可愛い存在だ。思春期辺りから生意気にはなってきたがそれも許容範囲。今年上の妹は高校卒業、下の妹は高校二年に上がる。義父が亡くなってから四年程、月日が経つのは早いものだ。

「お兄ちゃん、チョコ作って！」

カレンダー上は如月。外に出るとバレンタインのディスプレイがこれでもかと主張する今日この頃、上の妹が鬼気迫る顔で俺に言うてきた。

チョコってバレンタインのチョコだろうか。だとしたら自分でも作るのがスジというものだろう。

「お兄ちゃんが作った方が美味しいし綺麗なんだもん。本命用だから気合い入ったヤツ渡したいし」

確かに普段からねだられてお菓子やダイエット食やら作らされている俺の方が上手く作れはするだろうが、手作りチョコを男の俺が作るのは如何なものか。俺だったら男の作ったチョコは欲しくない。本命用だったら尚更自分で作ったヤツの方が良いと思うんだが。

「有名店のパティシエは男の人が多いんだから気にしない！」

いや、それはプロだから。そもそも素人で兄である俺が作るってというのが間違ってるって話。

「いーいーの！とにかくよろしくねっ」

何というか我が妹ながら強引である。本命相手にこんな調子だったら未来は明るくないかもしれない。…ご愁傷様だ。

そして製菓会社陰謀日前日、せっせとチョコレート菓子製作に励む俺がいる。上の妹の話聞いた下の妹も友チョコ用に自分も欲しいと言ってきた為かなり大掛かりになってしまった。

クラシック風チョコケーキに胡桃入りのブラウニー、クッキー入りの一口チョコや抹茶の粉をまぶしたトリュフ、ココアクッキー等等。家中甘ったるい匂いでいっぱいだ。

…三十にもなつて何やつてるんだろうな、俺。断りきれなかった自分のせいではあるんだが。友人共に妹に甘い、と言われる所以である。

湯せんで溶かしたチョコレートと無塩バター、生クリームを木ベラで混ぜる。さて次の手順にいくか、という所でいきなり目の前が

真っ白になった。

白い靄が晴れたと思ったら絶句するしかない光景が目の前に広がっていた。目が点になるとか驚きすぎて声も出ないとかこっぴつこのを言っただろう。

『ありえない』の一言に尽きる目の前の光景は俺に現実逃避を起こさせる間もなく現実として襲ってきた。

「危ないっ」

男の声と認識する間もなく襟首を掴まれて後ろに引っ張られた俺

は不意の行動に呆気なく尻餅をついてしまった。左手に持ったチョコの入っているポウルは何とか中身を溢すことはなく、木ベラは右手に力一杯握りしめられている。

ゲフゲフとむせる様を合わせなくとも情けない格好だ。しかも舞い上がった土埃や何やらでポウルの中のチョコレートは残念な事になっっている。いくら溢れなかったからといってもこれは食べる気がしない…。

「大丈夫ですか？魔法使い様」

………は？

茫然と見上げた先にはシスターっぽい格好をした妹達と同年代の女の子と多分さつき俺を後ろに引っ張ったと思われる革の鎧のようなものを身に付けた軽装の男。

少女の口から『魔法使い』とかいう言葉が聞こえたような気がしたが…もしかそれは俺の事か？巷で言うところの魔法使いにはなつた覚えはあるが、それよりも俺の常識に当てはまらないこの状況は何。

先程まで俺が立っていた場所に目をやると魔方陣のような紋様があった。が、地面が大きく抉れ、それは大部分が欠けていた。まるで破壊力のある何かがあつたように。

ええっと、取り敢えずありがとうございます？

「いえ、こちらこそこのような場所に喚んでしまって申し訳ありません、異世界の魔法使い様」

シスターっぽい…シスターでいいか、少女が今にも泣きそうに謝ってくる。命の恩人にこんな事言うのもあれだが俺は君の言う『魔法使い』じゃないと思う。生まれてこの方魔法なんぞ使った覚えはないし超能力も持っていない。人違いではなかるうか。



「ありえません」

キツパリと言い切られても違うものは違う。俺が魔法使いだという根拠は何だ。

「黒い髪に瞳、それから黒衣。偉人を召喚する召喚陣から来られたので間違いありません」

偉人？いやいやいや、黒髪黒瞳は日本人の優性遺伝子だし、黒衣といつてもブラックジーンズに黒のトレーナーと黒いエプロンだから。普通の格好だからこれ。

そもそも召喚陣とか異世界とかワケわからんわ。

「説明させていただきますと、あの召喚陣は異世界よりあらゆる『力』を持つ偉人を召喚する魔法陣なんです。今回使った紋様は魔法に長けた偉人を召喚する物ですので……」

そっから出てきた（らしい）俺は魔法を使う偉人、と…。

「それから『黒』はすべての色を内包する色。その色を持つものはこの世界では魔力にしる身体能力にしる例外なく何らかの『強大な力』を持っているのです」

あー、頭痛くなりそう。しかし俺が魔法使いかどうかは置いておいて話を進めないと状況がヤバそうだ。だってほら、話している間も爆発音やら金属音やら得体の知れない生物の馬鹿デカイ音量の雄叫びやらが聞こえてくるから。

まさにゲームや映画やアニメの世界の様な光景が繰り広げられているそこは一步間違えば阿鼻叫喚。確かに目の前の光景を見る限り

俺のいた世界ではありえない。CGならばともかく。

シスターが言っていたようにマジで異世界なのか。「冗談抜きで夢なら醒めてくれ。」

ビリビリと空気を震わせるような気味の悪い雄叫びを上げている得体の知れない生物はキメラっぽい何か。何種類かの生物を交ぜた感じで統一感はない。頭は猛禽類を思わせる鳥で胴体は縞模様がある事から多分虎、尻尾は蛇みたいな感じで左右に揺れるたびに周囲の木々をなぎ倒している。何て力だよ。あれを当てられたら人間なんてひとたまりもないんじゃないのか。

そしてそんな危険生物と戦っているのは甲冑を纏った騎士っぽい男と、身の丈以上の大剣を軽々と振り回す露出の高い服を着た女、デカイハンマーを持った猫耳猫尻尾の女の獣人？と、筋骨隆々な格闘家然とした男。俺を助けてくれた身軽な男は短剣を持って、いつの間にか戦いの輪の中に入っていた。

シスターを除いた五人は力を合わせて戦っているが、キメラの表面が見た目よりも硬度だか弾力だかがあって物理攻撃がききにくくいようだ。決定力に欠けているようではなかなか倒せない。小さな傷は付いているがダメージを与えるまではいつていない感じ。

素人が一目見ても解る戦い慣れているような彼らがこんな状態なのに、何の力もない一般人の俺にどうしろと。

「攻撃魔法をお願いします！魔法攻撃ならあれにも効果があると思います」

必死な形相で言われても。そもそも本当に魔法なんて知らないしなあ。誤解を手っ取り早く解くには魔法なんか使えないという事を証明するしかなさそうなんだがどうしたものか。人の生命がかかっているから早く魔法が使えるとかいう別の人を喚び出してもらわないと。

そしてさつさと俺を元の世界に還してくれ。こんな状況、一般人には死ねと言ってるようなものだろう。

取り敢えず、使える魔法なんてないのだから俺の青春時代にハマったゲームの魔法でも言ってみるか。仮面とか最終幻想とか竜の冒険とかの。ゲーム中の魔法だったら何となく覚えてるし。使えなきゃ使えないで俺が偉人とやらじゃないっていう証明のひとつになる……といいなあ。

というわけで電撃系の単体最上級呪文やら重力系の魔法やらをいくつかチヨコが付いたままの木ベラを構えて唱えてみた。間抜けとか言うな、何事も気分は大事だ。

何も起こるわけない、と思った俺の予想に反して物凄い轟音と目に痛いエフェクトと共に何かが起こった。何かがとか言ってみたが間違いなく魔法だろう、これ。ええっとマジで？

「凄い凄い、さすが異世界の魔法使い様です！」

年相応にきやあきやあと騒ぐシスターを余所に呆然とする俺。攻撃目標としたキメラは黒い煙を上げながら炭化。信じられない出来事に木ベラを構えたまま黒焦げの物体を見つめていると、それはキラキラとした粒子になりながら空気に消えていった。信じ難いがちよつとこれは本気でどうしたものかなあ……。

で、めでたくも(?)魔法が使える事がわかったわけだが還るにはどうしたらいいんだ? 召喚された理由のキメラは倒したんだからもう用はないだろう。喚んだのはそっちなんだから責任持って還してくれるんだよな。期待を込めて滅多に見せない良い笑顔で問う。シスターの顔に冷や汗なんて見えないぞ。

「え、えっと……召喚陣が壊れて……しまつてて」

壊れたのなら直せばいいだろう。ほら、人と話す時はちゃんと視線を合わせような？さっきのハイテンションはどこにいったんだ？

「あの、破損した部分を直してもそれはもう別物になってしまおうで……えっと」

じゃあ別ので還してくれたいんだが。喚んだんだから還す事は出来るはずだよな。……何故後ずさるかな？君は。

「召喚した時の陣じゃないと還せないんですつ。申し訳ありません！」

残像が残るくらいに勢い良く頭を下げるシスター。マジでか。冗談とかじゃなく？本気で言ってるのか、それ。ふざけるなよ、そっちの都合で勝手に喚び出しておいて還せませんか？勘弁してくださいよ。

「こちらでの生活で不便がないように手配させていただきましたから」

そういう問題じゃないんだ。突然の別離。あの世界で死んだのならまだ諦めもついたかもしれない。けれどそうじゃない。なんて事だ。未練ばかりが募る。怒りのやり場は彼等に向くがどうしようもないって事が現実だ。理性では理解出来ても感情が追い付かなくて目眩がする。

あーあ。妹と同じくらいの、しかも女の子に怒鳴るなんて恰好悪いな、俺。いい年した大人が何やってんだろうなあ……。

暗くなっていく視界の中で見たのは慌てるシスターや駆け寄ってくる男女。ああもうダルいし考えるのも億劫だし投げやりな気分だ。もういいや、今はこのまま眠ってしまえ。考えるのは後だ後。

それから後で聞いた話によるとこの時の俺はMPだかSPだかが無くなって気絶したのだとか。そりゃそうか、いきなり最上級呪文をいくつもブツ放したんだからな。初心者の癖に無茶苦茶過ぎる。身体がついていなくて倒れもするわ。

そんなわけで母、妹達、友人知人諸兄。

俺はどうやらこの異世界で『魔法使い』という何ともファンタジーな偉人業に就くハメになりそうです。

別れの挨拶も出来ず、こちらから連絡も出来ませんが俺はこっちで元気にやっていこうと思います。

心配するとは思いますが俺の事は気に病む事なく、どうか健や

かにお過ごし下さい。

それでは皆様、お元気で。

そうそう、妹達よ。

頼まれていたバレンタインデーのチョコは出来た分で勘弁してくれ。

## オレの使い魔

……何でこうなった。その時の俺は途方に暮れた。

異世界に来て、帰れなくなって、なし崩し的に魔王討伐に参加させられるとかマジでどうなの。

命のやり取りなんて身近にない現代日本で暮らしていた俺にこの世界は容赦なかった。平和ボケした日本人にはもう本当に勘弁してくれっつー感じ。平和ボケの何が悪い。身の危険がない事は良い事だ。常に命の危険にさらされてる荒んだ生活なんてたいていの人間は嫌だろう。

そもそもどうして俺が魔王を退治しに行く勇者一行に付いて行かねばならないのか。何て事はない。俺を喚び出した連中が勇者一行で、魔王を退治するための旅の途中であり、今後の俺の身の振り方を決めるには魔王を倒した後にお偉いさんに決めてもらうしかないから、らしい。

安全な場所で魔王退治が終わるのを待ってるとか、今からお偉いさんの所へ行くなんて俺の案は却下された。国が滅んだら保護も保障もないだろ、と半ば脅された形。反則的な魔法を使えた俺がいた方がいいのは解る。出来るだけ安全に、かつ早く旅を終わらせるために『使えるものは使おうぜ』『精神も良いとは思つ。……俺に関係がなければな。』

そんなこんなで魔王退治御一行様に一名様追加で付いて行く事になった俺は、それなりに活躍しつつ旅を終えた。え？旅の様子とか魔王との闘いとかはって？説明がめんどいからパス……。まあその内話す事もあるかもしれないかもな。

この旅の途中でこの世界の常識やら何やらを教えてもらいながら今後の事を考えると溜息しか出てこなかった。異世界で言葉がわかっただけマシなのかもしれないが、生活するために色々と一から築いていかなければならないなんて。

しかし人間は順応する生き物である。異世界に召喚されて数年。おかげさまで食べるために生きてた動物も捌けるようにもなりました。

始めの頃は無理だった。自分の手で生き物の命を奪うのはなかなか慣れなかった。だって現代では肉も魚もパックで売られていたんだから。生きているものを絞める時の断末魔の声とか、手に伝わる感触とかホントもう、な……。そしてようやく捌けるようになっても食えなかったり。……うん、俺の血肉になっってくれる食べ物に感謝。

魔物を倒していただろうって？魔物を倒していた時は魔法しか使ってたから直に命を絶つ感触はなかったし。そもそも殺るか殺られるかという状況で自分の命を選択するのは当たり前だ。生きたいのならば。

ゴタゴタが無かったとはとてもじゃないが言えないが、そんなこんなで魔王討伐後。それなりにのんびり暮らしていた俺の元にまた厄介ごとがやってきやがって下さいました。溜息しか出ないな、ホントに。

現在、俺の住まいは自然あふれる森の中の一軒家である。王都の住まいをお偉いさんから勧められたが、政治やなんかの厄介事には



巻き込まれなくなかった為、せめてもの抵抗で王都から離れた場所に住む事にしたのだ。この世界に居るからには完全には厄介事からは逃げられはしないのだが。

なんせ勇者様御一行に数えられている『偉大なる魔法使い様』とというのがこの世界での俺の肩書き。しかも異世界人で、国や個人に忠誠を誓っているわけでもなし。下手したらこの国の、あるいは世界にとって都合のいいように使われ、使い捨ての駒のごとく消される可能性が常に付きまとう。大きな力を持つものを野放しにするのは国としても、個人の感情としても危機感が募るのは明白。

考えてもみてほしい。自分の住む場所に核爆弾並みの兵器がいつ爆発するかもしれない状態で放置してあるのだ。普通は排除しにかかるだろう。

実際魔王討伐の祝いの式典中、城に滞在していた時は暗殺者が来ていたし。常時気が抜けない中、寝不足やらこの世界に一方的に喚ばれた理不尽やら闘いのストレスやら、その他諸々が溜まりに溜まりまくった俺はぶち切れました。

お偉いさん相手にOHANASHIである。お偉いさんが誰とか、どんな手段を使ったとかの詳しくは省く。H A H A H A、肉体言語は使ってませんよ？仮にも俺は魔法使いだし。俺以外の勇者一行と違って肉弾戦は向いてないし。でも魔法って肉体を傷つけるもの以外にも色々あるよな。ふはは。

そんなわけで平和主義者な俺は、こんな事態に巻き込まれた賠償金と互いの不干渉という約束を取り付け、一応の安息の地を得た。そして勇者御一行の伝手と国からの賠償金とを使い、王都から離れた街にある森の中に家を建てたのである。

森の中の一人暮らしにもそれなりに慣れた俺はその日、日用品を買い足すために街に出ている。人間、一人では生きていけないものだ。隠者を気取ろうとも生きていくためには色々と必要なものも出てくる。

で、欲しかった物を手に入れ、買い物から帰ってきたら家の玄関の真ん前に何かあるのが見て取れた。出かける前はなかった物だ。近づくると手の平大の丸い物体が二個、ドアの前に転がっている。白いのと黒いの。陽の光に照らされ、キラキラとしているそれは宝石のようにも見えた。

……正直嫌な予感しかしなかった。まったくもって怪しすぎる。何かの罠かと勘ぐるほどに。誰が置いたか知らないが、もうこれは厄介事だろう。見て見ぬ振りをしたいがドアを開けなければ家に入れない。逡巡したのはわずかな間。俺はその二つを拾い上げ、全力で樹々の生い茂る方へ投げ捨て……ようとしたら、ガラスの割れるような甲高い音をたてて石ころ（仮）が割れた。

「あるじー」

「あるじさまー」

石ころ（仮）はどうやら何かの卵だったようだ。割れた欠片はサラサラと砂のように崩れ、俺の手の中には卵から生まれた何かが。ああ、やっぱり厄介事か……と遠い目をした俺は悪くない。ここは投げるではなく蹴り飛ばすのが正解だったか？と現実逃避する俺は悪くない。悪いのはおそらく多分きつと俺の運なのだろう……。あーもつ。

「ムシするでないー！」

「あるじさま、気をしつかり」

右の手の平の上でピコピコ飛び跳ねながら自己主張する謎の生き物その一と、左の手の平の上に座り込みペシペシと叩く謎の生き物その二。現実かな、現実だな、現実でしかないな。この世界は卵から人間が生まれるのか？つてそんなわけあるか。両手に四、五歳程の年齢的にも物理的にも小さい女の子を乗せた俺は途方に暮れた。人間ではあり得ない。もしかしたら魔物とか？

「なっ、まものなどではないぞ！」

「ゆいしょ正しいせいれいなのですー」

どうやら口に出していたようだ。しかし精霊ときたか。反則的な魔法の力まであるのに精霊まで……。精霊信仰もあるこの世界で精霊の主とか。やっと落ち着いてきた状況にまた爆弾が降ってきたな、オイ。

このままここで突っ立っていても仕方ない。家の中に入るとしよ。色々と聞きたい事もあるしな。しかし精霊っつーのは卵生なのか。いや、うん、まあどうでもいい事だな。

「で、何でお前ら俺ん家の前にいたの」

一応リビングと言えるような部屋で話を聞く。ちなみにウチは俺のこだわりで土足厳禁である。家を建てる際、どうせなら住み慣れた環境がいいかと思い一般的な現代日本風の家を建ててもらったの

だ。家の中でまで靴は履きたくない……蒸れるし。雨の日の後の掃除とか面倒くさいし。

お茶と一緒に机の上に置いたクッキーを口いっぱい頬張る自称・精霊共に胡乱な目を向ける。これ食ったら出て行かないかなーと考えるがまあ無理だろうなあ。『主』言われたしな……。

「われらせいいいは力のかたまり。しぜんの力とまりよくのたまる『場』で生まれるのだ」

腰まである真っ直ぐな黒髪に、紫の瞳のちんまいのが答える。服はなぜか紫地に鮮やかな華の描かれた振り袖である。そして言葉を続けるこちらは赤地に鮮やかな鳥が描かれた振り袖を着たちんまいの。こっちはオレンジの瞳にふわふわした肩の下くらいまである金髪だ。

「われらはあるじさまのまりよくこの森の力が合わさって生まれたのです」

何てこった。この厄介事は意図しないが俺が原因か！あまりの予想外な出来事に机に突っ伏する。動かなくなった俺の頭をつつく黒いのと髪を引つ張る金色の。わかった、わかったから止める。家の家系にハゲはいないらしいけど髪は毛薄くなりそうだから止めてくれ。

気を取り直して話を続ける。どうやら『場』で飽和状態になった力は精霊となるらしい。なら精霊というやつはポコポコ生まれていそうだが、自然の力が溜まるのにも魔力が溜まるのにも、そしてその二つの力が合わさるのにもとてつもない時間がかかるそう滅多にいないという。『場』自体も少ないから余計に。

そんな希少生物(?)な精霊が何故俺ん家に二匹……二体もいるのか。答えは簡単、俺の魔力が桁外れに強かったから。

いやもうほんとかんべんしてくれ。

もしかしてこの魔力がある限りまたこんなが増えるのか？と戦々恐々として聞いてみたらそれは無いとの事で少しほっとした。ただ漏れになっていた俺の余剰魔力は、ほぼこいつらに流れていくので今までのように大量に自然の力とは交わらないらしい。

ちなみに普通生まれただばかりの精霊には姿形は無いそうだが、こいつらの場合は俺の力が強かったために姿が人の形になり、俺の影響を受けて着ている物も着物になったということだ。日本人だから。気は早いが上の妹の成人式の着物とかも視野に入れてたしな。まさかこんな所でこんな影響が出るだなんて誰も思っまいよ。それにしても生まれただばかりでよくこんな知識を持っているものだ。

「せいいいとしぜんはつながっておるしの。ほかのせいいいによつてたくわえられたちしきも、しぜんをかいしてばうちりうけついでおる」

「力のつかい方もだいじょぶなのです」

おいおいおい、チートだな精霊ってやつは。生まれたばかりでこれって。

「さて、あるじよ。われらに名をつけるがいい」

黒いのよ。居丈高に胸を張り、腰に手を当てる仁王立ちする姿はお子様がやつても微笑ましいだけである。そして金色の。お前はお菓子に夢中だな。ハムスターみたいに両頬を膨らませてまで頬張るな。ああ、ほら、口の周りに菓子クズを付けた上にぼろぼろこぼし

てるから。

しかし名前、なあ。付けるのはどうせこれから長い付き合いになるのだから、呼び名が無いのはさすがにどうかとも思うし別にいいんだが何か特別な意味があるのか？。

「名はひとつの『呪』であり『守』」

「われらをよりせんめいにかたちつくるものなのです」

何か他にも色々言っていたがまあいい。俺とこいつらの関係はフアンタジーな知識という所の使い魔とか使役精霊とかいうやつらしい。これからどうなるにせよ、こいつらは俺の側にいる事は決定しているようだ。

それに元は俺の魔力である。俺の子供みたいなもの、か？恋人も嫁もないのに子供とか……。あー、うん。ちょっとへこんでいいかな。

「黒髪の方が『ラーリル』、金髪の方が『ルーレロー』でどうだ」

二人合わせて『らーりるーれろー』。黄色い着物を着て箒を持ったおじさんの口調で言うのがポイントだ。センスが無いとか安易だとかの意見は受け付けない。俺にそれを求めるのが間違いだ。

「うむ、『ラーリル』じゃな。あいわかった。あるじよ、これからよろしくたのむ」

「えっと、『ルーレロー』なのですね。よろしくおねがいますー」

とにもかくにも、先行きは不安なものが過ったり過らなかつたりするがこれからよろしくな、ラ行共。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2263s/>

---

三十路男の日々徒然

2011年10月7日00時09分発行